

## 作家論

### 黒木和雄私論（上）

林久登 スタッフ

#### I

#### 三重県生まれの異端児

黒木和雄は宮崎県えびの市出身となっているが、生まれは母の実家がある三重県松阪市西町である。幼少時、里帰りなどで時々松阪に帰ったことがあり、本人は「松阪は懐かしい街、私の故郷の一つである」と言っている。三重県は衣笠貞之助、小津安二郎、藤田敏八、市川崑、それに昨年（2018年）亡くなったアニメの高畑勲とそうそうたる映画監督たちが生まれあるいは育った土地なのである。



黒木の父は電気技術者で、小学校時代一家は旧満州国に渡っている。しかし、新天地で始めた生活も、妹が慣れないアパートの窓から転落死するという事故で暗転する。黒木家はそんなトラウマを背負って異国の地で過ごすことになる。

父の仕事の関係で、黒木少年は現地（植民地）の日本の小学校を転々としている。そのせいか、学校に最後まで馴染めず、朝、家を出ると登校するふりをして映画館に入りびたりになる。当時の嵐寛寿郎の『鞍馬天狗』や『右門捕物帳』に夢中になり、全然筋は分からなかったが『暖流』（吉村公三郎）に感動したという。小学校の高学年といえ相当早熟な少年だったのだろう。

#### 不登校生となり落第

学校からの連絡で家にバレ、父に叱られたり殴られたりしても、懲りず同じ過ちを繰り返したという。余程映画にとり憑かれていたか、学校に行きたくなかったのだろう。今で言う不登校生で、当然勉強は振るわず小6で落第。上級学校へ行く資格も失う。1942年、両親は進級させることをあきらめ内地の鹿児島島の祖父母宅へ預け軍人にさせようとする。自分が蒔いた種とはいえ、負け犬となって一人だけ日本に帰されることになり、釜山から関門海峡を船で下関に渡る。待ち受ける祖父母とは馴染みもない。さぞかし心細かったことだろう。

黒木少年は鹿児島島の祖父母の家に落ち着くも、地元の訛り

のある言葉が皆目分からず、またも中学受験に失敗する。しかし、一年後(45年)地元にも慣れやつと中学に入学する。ところが、さあ、勉強しようという段になるも、軍需工場に動員される日が続く。戦争は内地にもおよび、ある日アメリカのグラマン機の奇襲攻撃を受け、逃げる途中目の前で同級生が被弾するという惨事に会う。断末魔の友人の姿を見て恐怖のため逃げる。当時級友11人が犠牲になった。そのトラウマから今でいうPTSDになり2年間休学する。

三重県で生を受け、小学校時代は異国の土地を転々とし、戦時下で多感な少年時代を、慣れない鹿児島で過ごした黒木は、まさに彼の言う故郷喪失者(テラシネ)だったのであろう。しかし、このような環境で育ったことが後の黒木の強靱な精神力と忍耐力を育んだともいえよう。

復学後、(50年)先生の勧めで同志社大学に入学する。しかし勉強はそっちのけで、マルクス・レーニン主義にかぶれ学生運動に明け暮れる。卒業近くになっても就職活動はまともにやっていかなかったが、某教授のはからいで、怪しげな卒業見込みの証明書を書いてもらい、東映の助監督試験を受ける。このプロセスは同じ映画監督の藤田敏八によく似ている。彼の場合は演劇にハマリ、卒業間近になって、偶然日活

の助監督募集を見つけ、とりあえず食い扶持を求めて受けている。2人とも共通して言えることは黒木も藤田も映画は好きだったが、監督になろうとは思ってもしなかったことだ。黒木など映画はどうやって作られるのか、全く知らなかったという。2人は頭脳明晰であったことは確かだが、運も働いたのだろう、100倍とも200倍ともいわれた超難関を突破し、日活と東映の助監督部門に採用が決まる。

しかし、黒木は配属先が京都となり、学生運動の嫌な思いを一掃して東京を目指していただけに、あっさり投げ出す。結局54年、落ち着いたところは東京岩波の記録映画部門だった。彼は後に、「学生運動のせいで就職口がなく仕方なく記録映画の監督になった。だからどこか冷めていた」と言っている。

こうやって眺めてみると、黒木は少年時代から失敗と挫折を繰り返している。自分は大した人間じゃない。ダメ人間だと自覚していたようだ。しかし、彼にとって、この岩波での経験は大きかった。小川伸介、東陽一、カメラの鈴木達夫らと知己になり、50〜60年代のアーティストたちの溜まり場である新宿ゴールデン街の酒場で、多くの映画人と出会った。また、撮影所と違って記録映画部門(PR映画)は、4

5人の編成で撮るので、撮影、照明、編集など映画作りのイロハに始まり、移動の際の切符や弁当の手配など、何もかも自分たちでやらねばならなかった。それは、その後の彼の監督業に大いに役立った。特に映画作りにおいて演出とか脚本も大事だが、仕上げの編集がいかに大切かということを知

### 短編界のトラブルメーカー

PR映画はテレビのない時代のいわばCM、企業からのオファーを受けて、その意図に添ってつくるものだ。しかし、黒木は自分のイメージにあわせてマイペースで撮ったため、しばしば発注者と齟齬を生じ、やがて短編界のトラブルメーカーという不名誉な烙印を押されることになる。

岩波入社から8年が経ち、かねてから劇映画を撮りたいと思っていた黒木だが、撮影所で助監督の経験のない本人は所詮無理な願望と思っていた。そんなある日、ゴダール映画に出会う。その『勝手にしやがれ』を見て、黒木は「文法がなくても映画は撮れる、言いたいことがあれば素人でも映画は撮れるんだ」と、天啓のようなひらめきを感じたと言っている。そう思うと、居ても立ってもいられず、見通しもないまま岩波をやめる。でも、彼の場合人徳なんだろう、周りが

放っておかなかった。必ず誰かが声をかけてくるのだ。

そして、彼の劇映画第一作目の『飛べない沈黙』（66年）が実現する。長崎から北海道までまぼろしの蝶を追っかける物語で、戦後、旧天皇主義からマッカーサー主義へと急転換した矛盾、被爆者への思いやら、それまで暖めていた考えをぶった煮で詰め込んだ作品となった。スタッフ全員が劇映画未経験で、しかも完成していないシナリオで見切り発車している。撮影現場が混乱しないわけがない。現場でセリフが決まらず、シナリオが出来るまで俳優を待たせた、という前代未聞の珍事が起こった。しかし、この混乱する現場を、当時助監督をつとめていた東陽一が見事にさばいたという。黒木はシナリオが出来ていなくても、平気で撮影に入る。撮りながらつくっていく。ドキュメンタリー出身だけに怖くないのだ。それだけにリスクはつきまとう。思惑通りに進めばいいが、外れると悲惨なことになる。その後、彼はこのやり方で、たびたび辛酸をなめることになる。

### 借金を屁とも思わぬ男

『飛べない沈黙』は、意欲作であったことは確かだが、出来上がった作品は、作家性が強く、難解で配給会社である東

室の首脳陣に総スカンを喰いオクラ入りとなる。この映画のなかで、蝶の化身として新人の加賀まり子が起用される。若き頃の蜷川幸雄（後の舞台演出の鬼才）と逢引する楽しいシーンがある。

『飛べない沈黙』は一年後にATGの働き掛けでやっと公開されることになるが、次回作が決まらず3年が経つ。その後、『キューバの恋人』（69年）や『日本の悪霊』（70年）を発表する。遮二無二突っ走って作るが興行成績は振るわず、赤字続きで実務能力のない黒木は膨大な負債を背負い多くの人たちに迷惑をかける。

74年『日本の悪霊』発表から4年が経ち、黒木はやっと自分で撮りたい作品に出くわす。当時NHKの大河ドラマで『竜馬が行く』が放送され、ちよつとした幕末ブームが起きていた。しかし、黒木の眼からすれば、ちよつと違った。そんな竜馬は美化されていて真の姿とは思えなかったのだ。そこで、このブームに乗りながら、自分なりの竜馬像を作ってみようと考へ、戯曲家の清水邦夫に相談を持ち掛ける。

歴史上では、坂本竜馬は土佐藩を脱藩し、薩長連合を成立させ、武力での討幕の動きを抑えて大政奉還を画策した英雄

と見なされている。志半ばで暗殺されるが、その暗殺者は幕府側の侍であったというのが、定説になっている。

しかし、清水邦夫の脚本は違った。武力で幕府を叩いてこそ権力の交代が出来ると考える薩摩や長州藩の主流から見ると、幕府側に取り込もうとする竜馬のやり方は妥協にしか見えない。従って急進派の中には竜馬を排除しようという動きがあった。また、主流から外れた土佐藩にとっても、藩に逆らった竜馬を進んで斬って薩長に追従したいという思惑があった。つまり竜馬は幕府からだけでなく、仲間内からも刺客が襲って来るかもしれない四面楚歌の状況下にあったと清水は書いている。だから竜馬はいつもビクビクしながら隠れ家を転々とする。それは当時の全学連の過激派勢力の内ゲバに似ている。

### 怪優たちの出会い『竜馬暗殺』（74年）

そして、黒木がこの映画化を最終的に決めたのは、その清水の舞台『狂人なおもて往生をなす』に出ていた役者の原田芳雄との出会いだっただけでなく、その動物的な動きと精悍なギラギラ輝く眼を見て竜馬役は、この男しかいないと直感したという。彼は元々俳優座養成所出身の舞台役者だが、そのキャラに目

を付けた日活からの度重なるラブコールドに会い、すでに映画にも出演するようになっていた。しかし、彼にはこだわりがあり、自分が納得できない作品には決して出なかった。後に有名になった話で、黒澤明から『影武者』（80年）へ出演依頼があった。勝新太郎が黒澤明と揉め降りたため、その代役の打診が入ったのだ。しかし、原田はきっぱり断わる。「勤勉じゃないからね、窮屈さを楽しむ余裕がないんだよ」と言っている。つまり、どんな役でもワクにはめられて演ずることを嫌った。それが天下の黒澤であっても関係なかった。

その点、この黒木の作品には共感するところがあった。幕末の歴史を動かしたと言われる男も実は、女好きでダサイ男であったという黒木竜馬のマイナーな部分に反応したのだ。しかも、シナリオの中に、「所どころセリフの代わりに」「ここは自由にしゃべる」というト書きがあった。まさに、「ドキュメンタリー出身の黒木らしい。竜馬は原田を当て書きしたようなセリフ回しになっていて、彼は水を得た魚のようにスクリーン狭しと縦横無尽に駆けめぐっている。そして、奇しくもこの作品には、70年代の怪優と言ってもいい、石橋蓮司、桃井かおりらが共演することになる。

シナリオの中に、坂本竜馬と中岡慎太郎の人間を端的に表

している妙（桃井かおり）と慎太郎（石橋蓮司）のやりとりがあるので紹介する。慎太郎はこの時、妙に惚れている。

妙「斬るのですか、坂本様を」

慎太郎（狼狽）「ベコのかア言うな！竜の字は親友中の親友じゃ」

妙「ウソ。なぜお隠しになるのですか。妙が昔：坂本様に身を許した女だからですか」

慎太郎「妙さん……」

妙、いきなり体をぶつけてくる。慎太郎、よろめく。申し遅れたが、

妙は巨女である。

（※この映画の妙は桃井かおりなので、それほど大きくない）

妙（むしゃぶりつきながら）「坂本様は、けだものでございます」

慎太郎（もてあましてながら、あらぬことを口走った）「そこが、奴の強いところじゃ」

妙（更にむしゃぶりつきながら）「なぜ中岡様は、けだものになれぬのです

か！」

慎太郎（もはや悲鳴）「妙さん！」

（月刊誌シナリオ 74年9月号）

この2人の会話は、竜馬と慎太郎の性格をコミカルに言い

当てていて楽しい。つまり、慎太郎は直情的で堅物、憂国の志竜馬は女にだらしなく、いい加減な男だったと、いうことだ。

それから約40年後、桃井の呼びかけで、初老期に入った戦友たち3人は久しぶりに集合。深夜、酩酊状態で雑談をしている。その中で、愉快なやりとりがあるので紹介する。原田はひたすら飲んでいる。

桃井かおりは、この『竜馬暗殺』の前『あらかじめ失われた恋人たちよ』（田原総一郎、清水邦夫 71年）という映画でデビューしている。御年19歳だった。この時、いきなりファックシーンがあり、桃井は共演した石橋に不安を隠せず泣きついたという。

石橋 「かおりは当時19歳で、純情で、こんなしたたかな女じゃないから、怖かったんだろうな。何かシトシトしちゃって「見てて」て、言うんだよ」

桃井 「そんな意味深には、言わないでしょう。かおりちゃんは」(笑)  
石橋 「言ってたよ、泣きながら。だから俺は、かおり、大丈夫だよ。お前の存在の方が強いんだからって。あの時お前をぐっと抱きしめたんだよ。あのまま、流れ込んでしまえばよかったんだよね。理

性的になっちゃたから、ついにお前とやれなくなっちゃった」  
桃井 「どうして私って、引き倒されない女なのかしら」(笑)

(原田芳雄・風来去 2012年 日の出版)

前者の妙と慎太郎の2人のセリフと重ね合わせると面白い。つまり、デビュー時の桃井は石橋に無防備だったが、石橋は妹をあやすようにして思いとどまっていた。3年後、共演したこの作品では、劇中で堅物の石橋は、桃井の挑発に乗って遂にけだものになる。虚像と実像がないまぜになってすこぶる面白い。



## 負と負の出会いが開花

ちよつと横道にそれたが、黒木はこの映画をきっかけに、彼のほとんどの作品に原田を起用している。余程ウマがあったと見える。黒木は原田のことを「彼は骨太のイメージがあるが、心のどこかに自分はダメ人間だと思っている節があり、同じような劣等感を抱えている私と共感するところがある」と言っている。

この映画は竜馬が暗殺されるまでの72時間を描いたもので白黒作品。竜馬は絶えず刺客に襲われている。近江屋の土蔵に隠れて生活をしているが、同じ土佐藩出身の中岡慎太郎すら油断できない。その隠れ家の屋根伝いに娼婦の幡（中川利絵）が住んでいて竜馬は時々訪れている。その弟右太（人斬り以蔵こと岡田以蔵）に松田優作がなっている。竜馬を斬れば有名になれると薩摩からやって来たのであるが、その存在に圧倒され斬ろうにも斬れないジレンマに悩まされる。実生活でも当時優作は原田に心酔し、彼の後をいつも追っていたというから、面白い。

さて、この作品に対する思い入れはともかくとして、黒木は撮るにあたってハタと困った。スタッフたちの誰一人時代

劇をやったことがなかったのだ。刀をどつちに差していいのかわからないという有様だった。なんとも呑気な話である。あわてて時代劇のノウハウを持つ「映像京都」に協力を求める。幕末の時代劇でありながら、気持ちは現代劇でもあった。彼は竜馬の暗殺を当時の学生運動の内ゲバをイメージしていた。つまり、ラストで敵か味方かわからない輩（やま）にあっけなく2人は殺される。その対象が時代のカギを握る人間であっても、市井の平凡な人間であっても、変わらないところを描きたかったという。

この映画はATGで撮ることが決まった。ATGとはアート・シアター・ギルドの略で62年、主に東宝の出資で発足。資金がなくても、ATGが認めた革新的な作品なら折半で映画を作ろうというもの。新人監督の登竜門のようなものだった。予算は1000万円で折半だから500万円づつということになる。いつものように収支に疎い黒木は見切り発車したからたまらない。スタッフたちは金策に走り回るようになる。挙句の果て、新宿ゴールデン街のママから2〜3万カンパしてもらったりもしたという逸話もある。とにかくクランクインしたもののフィルムは足りない、飯代がない、切符が





買えない、ないない尽くしだった。撮影現場では昼飯もまともに出ず、原田や優作は洗面器でご飯を炊いて、それにインスタントカレーをぶっかけて道端で喰うと言った有様で、皆、

栄養失調気味だったという。そんな厳しい条件下だったが、現場の映画作りにかける熱量はすごかったという。黒木という監督に全幅の信頼を置いていたということなんだろう。



## 原田芳雄という無頼派俳優

さて、原田芳雄について触れておこう。彼は少年時代一人っ子の暗い性格で、劣等感の固まりのような若者だったという。勉強がきらいで、父親が日本人形の職人だったこともあり、手に職をつけようと工業高校に入れる。ところが入ってから機械いじりが全然だめだということに本人が気づく。成績もドン尻で一年生の後半に気が付いたら、精神的におかしくなり、自閉症に陥る。黒木も少年時代PTSDになり、挫折経験がありこの2人よく似ている。

しかしある時、誘われて高校演劇に引っぱり出される。そして、羞恥心なく体が反応することに気づく。それからというものの自閉症から徐々に抜け出し、アルバイトを兼ねエキストラなどに参加するようになる。つまり芝居が対人恐怖症のリハビリとなった。日頃、人前に出るのが苦手な論理的に話の出来ない原田は、他人の人生を生きる俳優としてならやっいていけるのでは、と考えるようになる。

俳優養成所に入ってから4月謝滞納で落第し3年の処4年かかっている。入ったのは14期で同期に清水紘治、吉田日出子たちがいたが、卒業の時は15期の栗原小巻らと一緒にだった。劇団員になって、同期生の中から俳優座に指名さ

れ数名の中の一人として残ったが、公演ではその他大勢の役が多かった。養成所期間を入れると、あつと言う間に10年が経っていた。

その頃(70年)になると日活から熱心な勧誘を受け映画にも顔を出すようになる。当時、日活はあと一年で閉鎖するといった大変な時期で、現場は騒然とし熱気があった。原田はこの現場が面白くなり俳優座的なものは、いつのまにか、ぶっ飛んでいった。沢田幸弘や藤田敏八の現場は台本があつて無きに等しく、アドリブもOKで好きなようにやらせてくれた。何といつても、映画の中に遊び心があるのがたまらなかつた。彼は「映画は遊びだ、真剣に遊ぼう」と言い放つて、無頼の人生を演じるゲームに夢中になっていった。そんな時に、黒木から声がかかる。

実は、私の映画開眼はこの『竜馬暗殺』と言っても過言ではない。高い志を持った歴史上のヒーローも一皮むけば、ドジで女好きな男であったと喝破する「黒木リアリズム」に私の竜馬偶像は瞬く間に崩れ、その型破りな映像に息を呑んだものだ。黒木はドキュメンタリー映画の世界が長かつたこともあり、リアリティとアクチュアリティを大切にし、予定

調和型の映画や美化したドラマ作りには見向きもしなかった。そして、人間の負の部分に光を当てた独自の作品をつくりだした。失敗作もあったが、そんな黒木の世界は文句なく面白く、彼の作品から目が離せなくなった。

## II

### 「腹はらの黒木男くろきおとこ」と呼ばれた黒木

私は、黒木監督と一度会っている。※三重フェスが、『父と暮らせば』の上映会を、彼を迎えて04年に四日市のT映画館で開いた時だ。私が黒木監督に詳しいというので、トークの司会進行を仰せつかった。

彼のトークは、朴訥とした話ぶりの中に、独特の諧謔が入り会場を沸かせた。特に盛り上がったのは、映画の主演宮沢りえの話だった。当時、大相撲の貴乃花との結婚が噂されていた頃で、はじめ黒木は彼女に対してチャラチャラしたイメージしか持っていなかったという。しかし、それは見事に外れ、りえは、撮影前に、広島原爆ドームを訪れ、しっかり事前に勉強をしていた。撮影に入ると、そのプロとしての集中力に黒木は彼女を見直したという。

その会場には私の朋友の藤田敏八の弟も来ており、後で紹介すると、思いのほか喜んでくれた。

※三重県内の映画愛好家が2003年の小津安二郎

生誕100年を記念して立ち上げたグループ

私はそれまで、黒木監督といえば、大手映画会社を蹴って、独立プロの道を選択した剛腕監督というイメージがあった。しかし会ってみると、想像していた監督と全く違う、偉ぶらず穏やかな紳士だった。独立プロという厳しい世界で、多くの秀作を残してきたやり手の監督という印象は最後まで受けなかった。本人はたいしたことをしてきたとは思っていないのである。後で分かったことだが、確かに彼はすべてをこなしてきたわけではない。そこには、黒木シンパなる集団の存在があり、企画以外のことはほとんどそのメンバーが面倒を見てきたのだ。

彼は「僕は仲間から「腹はら黒木男くろきおとこ」と呼ばれているんですよ」と自嘲気味に言う。なるほど言い得て妙で、仲間はきつと、初対面の温厚で韜晦な黒木の印象と裏腹に、実は、強靱な作家魂と、したたかな反骨精神の持ち主であることを知り、そのギャップを「ハラクロキ」と揶揄したのだろう。特に撮影時、周りの意見をどんどん取り入れるので、その気になって

いると、出来上がった作品は、そのカットが跡形もなくなっていることが多かったという。編集で黒木が切ったのだ。「最後に決めるのは監督だからね」と当人は平然としていたという。

### 黒木の金字塔作品『祭りの準備』（75年）

さて、『竜馬暗殺』でやっと目の目を見た黒木は、翌年『祭りの準備』を発表する。この作品を撮るきっかけになったのは、新人脚本家の中島文博から送られてきた一通のシナリオだった。土佐の高知からシナリオライターを目指して東京へ出て行く少年（筆者自身）を描いたものだ。これを読んだ黒木は少年を取り巻く猥雑な人間関係が面白く、折り返し本人と連絡を取る。すると、同じシナリオを監督の藤田敏八にも送り二股をかけた状態になっているという。

早速、中島の提案で藤田宅に乗り込んで話し合う。日活は当時ロマンポルノをメインに置いており、一般映画を撮るのには手続きがいった。一方黒木は『竜馬暗殺』で実績を作ったので引き続きATGでやりたい、と訴えると藤田は快く同意してくれたという。私は藤田のそれまでの作品のカラーから、これでよかったと思う。彼には土佐の村人や家族の猥

雑な人間関係を描くのは不得手と思ったからだ。

実はこの藤田と中島、一年ほど前、中島の書いた『赤ちやうちゃん』の映画化の際、生原稿を藤田が勝手に手を加えたというところで、大喧嘩をしている。元々、中島は血の気が多く、喧嘩早い。だが、完成した映像を見て中島はその出来栄に納得し、「良い映画を作るには、ライターが因縁をつけて、喧嘩を売るのもいいのかも」とうそぶいている。

その藤田は3年後に中岡京平脚本の『帰らざる日々』を撮っている。いわば、『祭りの準備』の続編のようなもので、ライターをめざす若者が、東京へ出て行ってからの物語だ。童貞喪失がいずれも女主導だったり、父がどちらにも外に女をつくり、母が一人で家を守っていることなど、プロットが似ていて面白い。しかし、『帰らざる日々』には『祭りの準備』のような血縁関係の葛藤はない。むしろ血の繋がりのない、自分の意志で選んだ友人との関係の方に比重を置いている。藤田は肉親のドロドロした世界を深堀することは生理的に合わない。

ちなみに、黒木は藤田と旧知の中で、彼の処女作『非行少年陽の出の叫び』（67年）で小説家に扮して出演している。この『祭りの準備』（75年）は文句なしに素晴らしい。

黒木にとっても中島にとっても記念碑的作品になったと言ってもいいだろう。劇中、シナリオライターをめざす主人公が、脚本家の大御所新藤兼人の言葉「誰でも一生の内に傑作の一本は書ける、それは自分の周囲の世界を書くことだ」を引用している。つまり、『祭りの準備』は、まさにこの言葉が当てはまる中島の自伝的シナリオだ。私にとっても、この作品のインパクトは大きかった。それは随所に自分が育った少年期のD村の出来事と重なるところがあったからだ。それが忘れていた故郷の記憶を呼び起こしてくれた。中島はその後売れっ子ライターになり多くのシナリオを書いているが、本作品を超えるものはないのではないか。

同じことが黒木にも言える。この映画は彼の金字塔になる作品だ。黒木は日頃「人間が持っている暗い部分、負の部分、恰好悪いところを見つめることで、普遍的な人間の姿が見えてくる。そんな人たちを描きたい」と言っている。土佐の荒々しい自然に囲まれた漁村の開放的なリビドーの世界で生きる村人たちを丸ごと描いた作品で、まさにその意図にピッタリの題材と言えよう。

主人公は昭和30年代の土佐の漁村で育った少年。地縁、

血縁に翻弄されながら、脚本家を目指し東京へ出て行くまでを描いたシナリオだ。

地元の信用金庫に勤める楯男（江藤潤）は母（馬渕晴子）と祖父（浜村純）との3人暮らし。父（ハナ肇）は外に女をつくって出て行っている。楯男は日頃の単調な仕事が面白くなくシナリオライターを目指しているが自信はない。好意を寄せているマドンナ涼子（竹下景子）との間もうまくいっていない。母は女ぐせの悪い夫に愛想をつかし、その分楯男に何かとうるさい。近くの泥棒一家と呼ばれる家には2兄弟がいて、兄は刑務所に収監中で弟利広（原田芳雄）はコソ泥をやりながらブラブラしている。彼らには家出した妹タマコ（桂木梨江）がいて、薬物中毒で大阪から帰って来る。

少年楯男に当時のミュージシャンの江藤潤、泥棒一家の弟の利広に原田芳雄がなっている。黒木は当初原田を楯男の父に考えていたが、原田自身がこの野蛮なコソ泥役を希望してきたという。利広は何かと楯男を「信用金庫！」と呼びつきまとう。出くわすとあいさつ代わりに彼の股間を掴み、「よう！勃つとるのー」と声をかけ、楯男を嫌がらせている。毒となる利広の存在が効果的で、土佐のおおらかな気風がよく

出ている。利広は兄が服役中をいいことに兄嫁（杉本美樹）に手を出すのが、罪悪感が全くといってないのだ。

この利広に似た男がわたしの故郷D村にもいた。2人姉弟で、姉も相当なヤンキーだったが、その弟N男は手癖が悪かった。村は農繁期になると、どこそこの家で何かが無くなったという話をよく聞いた。当時野良仕事で外に出てもほとんどの家が施錠をする習慣がなかった。だから空き巣狙いにとっては稼ぎ時なのである。Nの仕業とわかっていたが、そんなに事を荒げなかった。なにしろ皆貧乏で金目の物を置いていなかったから盗まれてもそんなに支障はなかったのだ。でも、段々エスカレートし、干してある稲が夜のうちに大量に盗まれた時は、さすがに御用となり、刑務所送りとなった。

さて、泥棒一家には家出した娘タマコがいた。大阪のキャバレーで働いていたが、ヒロポン中毒になり精神に異常をきたして帰って来る。血気盛んな漁村の青年たちは放っておかない。夜な夜な浜にいる彼女とセックスをする。楯男の祖父もその一人で、年甲斐もなく彼女に狂い子を孕ませてしまう。しかし、出産後正気を取り戻したタマコは祖父を寄せ付けなくなる。ちよつと気になったのが、気の狂った桂木梨江の調

子外れの歌、あざとい。自然体で歌った方がよかったのではないか。狂気の演技は難しい、一つ間違うと白ける。

私の幼い頃、近くに精神に異常をきたした色白の少女がいた。何が原因でそうなったのか分からないが、ある時期からおかしくなり、真昼間、私の家の前をスッポンポンで歌を唄いながら歩いていたのを思い出した。それは子供の眼から見ても衝撃的な出来事だった。困り果てた両親は、棟続きの家の畜の部屋に閉じ込めて育てていたということだった。当時の私の村にも、この漁村のような娘はいたのだ。

### 竹下景子の衝撃のヌードシーン

うたごえ運動に熱心だった女友達の涼子は、楯男が書くこととしてゐる村の男女の赤裸々な関係について「セックスの事ばかり興味を持って、もつと労働者階級が前向きに生きていく姿を書かんのか？」と批判的だ。ところがその涼子あろうことか、東京の教員組合からオルグにやって来た男に舞い上がり、体を許してしまう。そして、あっけなく普通の俗悪な女に成り下がった涼子は、楯男に許しを乞いすがって来る。一方多くの男にたらい回しにされたタマコは、出産すると毒気が抜け正気に戻り、子を持つ普通の大人の女になる。見事な



2人の女の対比だ。

この涼子には現役大学生竹下景子が抜擢される。清純さと生硬さを持つ彼女を見て黒木はマドンナ役にピッタリだと感じたそう。彼女が男を知った後、楯男を誘惑するショットは、黒木の指示に従い何のためらいもなく全裸になったそう。外見から想像もできないほどの豊満な身体で、黒木はビビッて？バストのアップだけでカットしている。フルショットで撮っておきながらカットするのは、なんてことだ。

この映画、何といっても、この親子三代にわたる生きざまが圧倒的な魅力を放っている。母の馬渕晴子は、外に女をつくって家を出ていった夫ハナ肇を許せない。自分は潔く女であることを封印し、誰にも指をさされない生活を送り、息子の楯男に生きがいを求める子離れの出来ない母を熱演。それはまるで母子相姦に近い。彼女の使う土佐弁のちよつとヒステリックなセリフが心地よく響くが、楯男にとってはねつとり絡んで聞こえていやだった。しかし、周りはそんな彼女を立派だとは思っていない。夫は「傲慢な女だ」と切って捨てて。楯男にしても、そんな母が鬱陶しく、どちらかというとな放蕩な父の肩を持つ。

その父役のハナ肇が愉快だ。仕事はバリバリこなすも滅法女好き。しかし、女房には頭の上がらない男をコミカルに演じている。そして、若い女に狂い子供まで孕ませた祖父に対し、自分の行状は棚に上げて、大真面目で説教する。その若い女に狂う老人を浜村純が怪演。そばで眺めながらオタオタしながら成長していく少年江藤潤の姿が、初々しくていい。家族のキャスティングが適材適所で素晴らしい。

これほど愚かで、でも健気な、家族の愛憎と絆を描いた作品を私は知らない。人がまつとうに生きるということはどういうことなのか、その象徴的な存在が楯男の父母だ。人間が作ったワクの中で自分の欲望を抑えて毅然と生きる母。一方、人間の根っ子にある欲望に正直に生きる父。どちらが正解なんだろうか。

答えの出ない人間の営みを土佐の大自然は静かに見守っているように見える。黒木と中島はそんな土臭い人々を、愛情をこめて見つめ、見事な人間讃歌のドラマに仕上げている。小津や山田の家族映画に負けずとも劣らぬ、映画史に残る秀作が出来上がったと言っているだろう。